

禁野本町遺跡 10-1 現地説明会資料

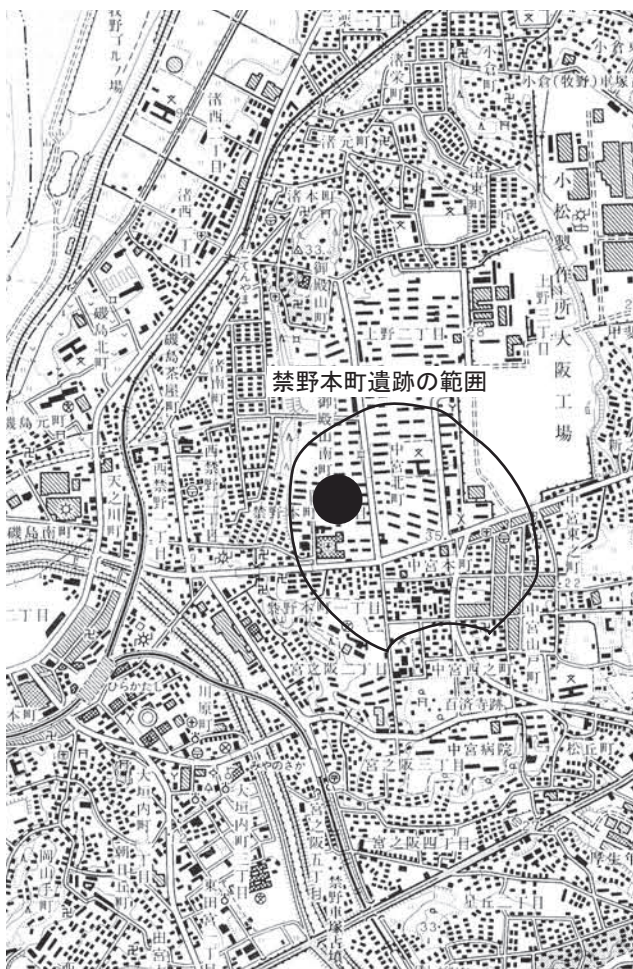
平成 23 年 3 月 5 日

(財) 大阪府文化財センター

今回の調査は、公務員宿舍枚方住宅建設に先立つもので、昨年 の 5 月 から調査を開始し、今年 の 4 月 までの予定で行っています。総調査面積は約 8000 m²で、このうちの約 450 m²について発掘調査現場を公開することになりました。

禁野本町遺跡は、枚方市禁野本町、中宮北町、中宮本町に広がる遺跡です。遺跡の発見は昭和 61 年で、今回の調査地南西に位置する保健センター建設時の調査に遡ります。

遺跡内では、これまでに枚方市教育委員会や(財)枚方市文化財研究調査会による 172 回にわたる調査が行われています。このほかにも、大阪府教育委員会が遺跡西側の府営住宅建て替えに伴う調査を、平成 15・16 年度には当センターが今回の調査地西側の公務員宿舍建設に伴う調査を行っています。



0 (1:25000) 1500m

*●は調査位置を示す

国土地理院(平成 12 年 3 月 1 日発行) 25000 分の 1 地形図(枚方)



0 (1:5000) 300m

*は調査位置を示す

大阪府建築都市部総合計画課『大阪府デジタル地形図(北部大阪・東部大阪)』2003

調査地位置図

これらの調査により、弥生時代後期末から古墳時代前期頃の集落跡、古墳時代後期の古墳、奈良時代から平安時代の集落跡、近代の禁野火薬庫に関する施設跡などが見つっています。

なかでも奈良時代については、従来、8 世紀後半頃とされる百済寺創建と関連して禁野本町遺跡に集落が営まれるようになると考えられてきました。これまでも百済寺の付近では、これを遡る前身寺院とされる遺構が見つっていました。しかし、最近の禁野本町遺跡の調査では、百済寺の推定創建時期を遡る 8 世紀前半の遺構が多く見つかるようになりました。この 8 世紀前半の遺構については、評価が確定していません。しかし、今回の調査地から見て東側の、中宮第 2 団地一帯では、官衙(かんが: 役所のこと)風の建物配置や出土した木簡などから、8 世紀前半に郡衙(ぐんが: 郡単位の役所、ここでは交野郡)があった可能性が指摘されています。ただし、百済王氏(くだらのこにきしうじ)の難波から交野の地への移住は 8 世紀後半と考えられていますので、郡司が誰なのか、またどういう経緯で百済王氏が住むようになったのかなど、まだまだ不明な点がたくさんあります。

今回の発掘調査現場の公開は、特別史跡百済寺や隣接する(財)枚方市文化財研究調査会の調査地における成果とのつながりから、特に奈良時代から平安時代における成果の概要について紹介したいと思います。

調査成果の概要

今回の調査では、奈良時代(8 世紀頃)を中心とした時期の、掘立柱建物や井戸、土坑、ピットなどの遺構が見つっています。これらのうち、見つかった掘立柱建物の多くは、方位よりも谷などの自然地形に左右されていると考えられるものがほとんどです(裏面参照)。しかし、今回の調査地から見て東側の中宮第 2 住宅一帯や、西側の公務員宿舍一帯では、東西または南北の方位を指向した建物群が見つっています。これらの方位を指向した建物群は、今回の調査地では東端に限られるようで、全域には広がらないと考えられます。

8 世紀頃の遺物で興味深いものに、まず百済寺跡出土瓦と同範(どうはん: 同じ型から型抜きにより作られたもの)の軒丸瓦片があります。同様な同範瓦はこれまでの禁野本町遺跡における調査でも出土しています。また、京都府長岡京市鞆岡廃寺(ともおかはいじ)出土瓦と同範と考えられる軒平瓦片があります。百済寺跡以外の遺跡と同範関係にあると考えられる瓦の出土は、遺跡内でも今回の調査地や西側の公務員宿舍一帯など、西端のごく限られた箇所ではしか出土しません。このような箇所では、鞆岡廃寺との関連も推定できそうです。

また、遺物では 9 世紀代の緑釉陶器、灰釉陶器、緑釉陶器素地などの破片の出土も興味深いものです。緑釉陶器は京都市の洛北・洛西産や愛知県猿投(さなげ)産のものが見られます。器種は皿のみならず、1 点のみながら花瓶(けびょう)という密教法具として使用されたと考えられる器種の破片もあります。

禁野本町遺跡を含む交野の地は、奈良時代の終わりから平安時代初めにかけて、桓武天皇や嵯峨天皇の遊獵や行幸があったことが文献史料から知られます。また、『伊勢物語』では惟喬(これたか)親王の交野の地での狩りの様子も描かれています。このような天皇や貴族たちの遊獵場としての性格も、禁野本町遺跡における遺構や遺物に反映されているのかもしれない。



竪穴建物と掘立柱建物（北から）

東側（写真左側）の竪穴建物は、2棟の掘立柱建物と重複しています。これらは、掘立柱建物（東西4間×南北2間：7世紀以前）→竪穴建物（8世紀前半頃）→掘立柱建物（東西2間×南北2間）の順です。西側（写真右側）の竪穴建物は、7世紀前半頃と考えています。



井戸（西から）

今回の調査で確認できた数少ない井戸のひとつです。一辺約3mの隅丸方形状のプランを確認して掘り下げたところ、深さは約3mありました。ただし、あまり水は沸きませんでした。



掘立柱建物（北から）

今回の調査で最も床面積の広い建物です。ほぼ南北を指向しており、南北5間（約11.5m）×東西2間（約4.5m）です。北側に廂を持ちます。建物の真ん中にある柱列は、この建物と重複する位置にある別の掘立柱建物です。



総柱掘立柱建物（南から）

建物の北東は近代の遺構にこわされていますが、東西3間（約6m）×南北3間（約6.6m）に復元できます。



柱穴から出土の須恵器壺（北東から）

東西2間（約3.7m）×南北3間（約5m）の掘立柱建物を成す柱穴のうち、南東隅の最上部から見つかった須恵器の出土状況です。



掘立柱建物（北から）

谷地形への落ち際で見つかった建物です。立地はあまりよくないと思いますが、柱穴の大きさは、他の比較的大形の建物と同様な規模です。建物自体の規模は東西2間（約4.3m）×南北2間（約3.7m）です。



道路側溝？と建物（北東から）

写真中央と右側にある平行する2条の溝が道路側溝と考えられます。道路東側溝の東側にはピット列が見られ、道路に平行して柵列があったのかもしれませんが。道路西側溝は北側を近代の溜池などに切られて残存しません。道路とすれば、幅は約6mです。